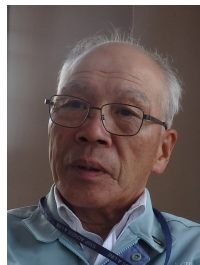


町田 浩さん

山口県溶接協会



溶接と出会って半世紀以上。昨年12月に74

歳となった町田さんは日溶協マイスターというよりも、全国の溶接協会関係者にとっては、山口県溶接協会・事務局長の方がなじみ深く、とくに2018年の全国溶接技術競技会山口大会を成功に導いた立役者の1人という方が記憶に新しいのではないだろうか。

昨年、事務局長職を

高山領一氏に引き継いだ。だがそれでも週3回、協会の仕事を手伝い、またマイスターとして地元の中小企業や工業高校などで技術指導にあたる忙しい日々を送っている。

町田さんは地元・山口県柳井市の中学校を卒業後、1962年、当時の日立製作所・笠

戸工場（現・笠戸事業所）内にあった技能者養成所に入所。工場内で必要される基幹技能を習得しながら、3年

間学業に励んだ。

「高度経済成長期を直前に控え、金の卵として養成所の同期は80人、6歳の少年たちが5人部屋で雑魚寝しながら、ともに過ごした日々が懐かしい」。溶接、旋盤、製缶、機装、鍛造というものづくりの基幹技能の基本を実習場で1年間学び、2年目からは製造現場で技能を磨いた。

1年目のある時、町田少年は実習場の窓から見えるアークの光にくぎ付けとなった。

「当時、近隣では日本石油の備蓄タンクの建設工事が急ピッチで進められており、ゴンドラに乗って高所作業する溶接士がカッコよく、日に日に大型鋼構

造物が完成していく光景に魅了された」。ち

景に魅了された」。ち

ようどその頃、笠戸工場では日立工場から製

品移管された圧力容器の製造がスタート。養成所2年目を迎え、溶接を主体とする圧力容器の大組立工程に配属された。

年齢の近い先輩や同僚がいる若い職場は活気に満ち、切磋琢磨も苦痛ではなかった。

「当時は見て覚えろ、という時代。先輩や上司によく叱られたが、一度も辞めたいとは思わなかった。先輩たちの溶接技量にあこがれ、一日でも早く追いつきたいと我武者羅だった」という。

『好きこそものの上手なれ』。まさに青竹が成長するかのように知識と溶接技量を磨いていった町田さんは、

社内での溶接競技大会で社長賞に輝くほどの腕前に成長した。「面倒見の良い師匠がいろいろなことに挑戦させてくれたから」と感謝し、

「これ（溶接）で飯を食っていく」という自信と決意が芽生えた、

た。

30歳代になると、後輩たちを指導する業務も加わったが、「教え子が技能五輪で2年連続して銀メダルを獲ってくれた時は、我がこ

と以上にうれしかった」と、人を育てる喜びを知ったことが以後のライフワークへとつながる一歩となった。

ものづくり現場一筋に35年間、数々の経験を積んできた町田さん。98年からは現場を離れ、日立笠戸技術研修校で溶接を教えるようになった。指導者として技量はもちろん、人格形成においても優秀な人材を数多く輩出し、とくに全国溶接技術競技会では、笠戸事業所から選ばれた山口県代表選手が3度全国制覇するなど、その存在感を示した。2012年からは前述したように、山口県溶接協会事務局長として、県下溶接技術のレベル向上と普及に尽力してきた。